
ホムヘルパ になった僕

星野いちろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホムヘルパ になった僕

【Nコード】

N6213D

【作者名】

星野いちろう

【あらすじ】

教会で住み込みをしながら、資格を取り、就職するが、また、統合失調症が再発し、二回、入退院することになった。そして、援護寮に入り、八ヶ月で卒業し、一人暮らしすることになる。

新米ヘルパ

新米ヘルパ

最初の研修

味噌汁を作るだけだった。

「それでも難しい。」

「こんなことじゃヘルパになれねえや。」

「掃除ならできるんだけど。」

T教S教会で掃除は、きたえられていた。

勤務地まで往復、徒歩。

帰ってきたら、教会の台所の掃除

「ピカピカにしてやる。」

休む時間は、9時から5時。

「一人の時間がないよ。つれえ。」朝、起きると

「もう、朝か。なんなんだよ。一体。」

「住み込みは、つれえ。肩身がせまい。(泣)」

「たいした人間でもないのに、宗教に入って修行なんて、俺には無理だよ。」ストレスがたまっていた。朝の掃除を終

え、朝食を少量食べ、歩いて勤務地まで30分。

「ああ、こんなこと、続くわけねえじゃん。」周りは、女性

ばかり、

「しかもレベルたけえ。」

「そうじゃなきゃ教えてもらえないか。」

「なんかバカにされてるみたいだ。」

「謙虚にならなきゃ。」俺は、女性とはいえ、素直で謙虚になった。

シ ツ交換の研修

「うっ。できない。全くわからない。」女性ヘルパ だから親切に細かく教えてくれる。

「有難い。」負けず嫌いの俺は

「一分以内にシ ツ交換してやる。」でも、できなかった。

「俺に介護なんてできるのか。」

ある時、利用者さんができ、先生と三人で行くことになった。

音楽好きで八 モニカや、見たこともない楽器を見せてもらった。

先生が色々と話し相手になっていた。

「結構、介護って楽しいなあ。」

帰りに

「楽しかったです。また、来ますね。」（笑顔）

先生

「いい声かけですよ。」

「おっ、褒められた。」

「俺にも介護できるかも。」単純な精神構造だ。でも、褒められて嬉しかった。自信がついた。

「なかなか、先生、教育上手だな。」でも、その褒められた一言で俺は変わった。

「絶対にプロのヘルパ になってやる。」それから、気合いを入れてチャレンジ精神旺盛になった。しかし、また、難関。

調理の研修

「頼むから作り方を手取り足取り教えてくれ。先生。」必死だった。だってプロのヘルパ になってやると決めたんだ。質問しま

くり、手取り足取り、調味料の量や、野菜の切り方など教わった。ほとんど、自分でしてないが、完成した。先生が

「教会に持って帰って、はじめて作った料理を食べてもらい。」

「自分でほとんど作ってないんだけど、自分で作ったのと一緒に教会に持って帰って」

「今日、研修で作ったんですよ。食べてもらえませんか。」娘さんが、一口食べた。

「おいしいよ。」自分で作ったわけじゃないので嬉しくなかった。

「でも、少しは手伝ったから、まあ、いいか。」

それから、たくさん利用者さんのお宅へ派遣されるようになった。

会社の社長だったNさん。阪神ファン、TVで阪神戦を見ながら、

「Nさん、一緒に歌いましょう。」

「六甲おろしに颯爽とー。」

「Nさん、ノリがええなあ。」毎回、訪問する度に六甲おろしを歌った。

ある時、事務所にいると、電話で主任から

「Nさんが倒れてる。すぐに来てください。」

「わかりました。」行ってみると、駐車場のところでこけていた。

「Nさん。大丈夫ですか。立ってますか。」電柱に捕まり立たれた。救急車が来た。僕は、

「大袈裟になつては、いけない。」と、判断し、

「Nさん、家に帰れますね。」

「うん。帰る。」救急車は、帰っていった。Nさんの歩行介助をして、マンションの上まで連れて帰った。

「Nさん、問題が大きくなってよかったですねえ。」Nさんは、

ベッドに座って黙っている。しばらくして、

「大袈裟にならなくてよかった。」僕は、

「うん。これでよかったんだ。」 一件落着。

Fさんのお宅では、一時間の掃除。僕の得意分野だ。でも、まだ、未熟な僕は、四角四面の掃除をしていた。今になれば几帳面過ぎて、きれいにするのはいいけど、ヘルパの掃除としては未熟だったと思う。そのうち、1日、5件行くようになり、月、13万、稼げるようになった。

再発

しかし、とうとう、統合失調症が再発した。教会に帰った夜、

「あんた、冷蔵庫漁ったやろ。」その瞬間

バン

食卓を正面に倒した。

「漁ってへんわ。」向かっていった。

「冷蔵庫なんか漁ってへんわ。」そのまま、TVの部屋のテブルを

バン

暴れまくった。ストレスが限界にきていたのだ。わめいていた。

「警察や。」

「僕が電話してやる。」受話器を上げて110番を押そうとした瞬間切られた。急いでコンビニの前の公衆電話にテレフォンカードを入れ、警察に電話した。そして、教会に戻ってきて、割れていた皿を拾い、炊事場で洗っていると、背後に気配を感じ、包丁を持ち、バツと振り返り包丁をつきつけ、

「出て行け。」

警察が来た。僕は、急いで玄関に行き、両手首を合わせ、

「刑務所に放り込んでくれ。」警察官は、

「まあ、まあ。」

「ちよつと、おいで。」とパトカーの中に連れて行った。警察官に「教会には帰らない。」

「じゃあ、どこに行くの。」黙っていた。そして、警察署に連れて行かれ、長椅子に座っていると、父親が来た。そして、通院していた病院に車で連れて行った。

「先生、おられますか。」

「この時間は、受け付けておりません。」

「親父がたのんどのやるがい。」

「黙つとけ。」

受付の人は、状況に気付き、Dr.に連絡し、Dr.が外来に来た。診察室に入り、教会での様子を話すとDr.は

「これは、あの病棟やな。」そして、看護師に連れて行かれた。病棟に着くと

「一人になりたいから保護室に入れてください。」一晩、保護室で寝た。朝、起きると

「寂しいから出ます。」

「寂しいから。」そして、病棟のベッドへ行った。

二回目の入院

ロッカーに袋に入れたエコ を40個。いくらかお金を持っていた。友達ができ、毎日、午後一時半に二人でお菓子を飲み食いた。ストレスが抜けていなかった僕は、ある日、別の部屋のオジサンに腹を立てカンの灰皿を取って来て、目の前でカンの裏側を「なめとんのかい。」と殴り潰した。

ある日、一台のベッドの掃除をした。ヘルパ のプライドが高い僕は、必死で分解を手伝い、雑巾できれいに拭きまくった。きれいになったベッドを見て自己満足に浸った。

そして、エコ 40個をどんどん人にやった。僕は、タバコがなくなった。Yさんが

「N君、コ ヒ とタバコを自由にのんでいいからな。」神様の御守護に感謝した。

「いい人と同部屋なってよかった。」Yさんは、非常に面倒見がよく仲良くしてくれた。隣のベッドのオジサンは、夕食になると、オカズを分けてくれた。

「N君、あげるわ。」

「ありがとうございます。」とても至れり尽くせりの有難い部屋だった。お蔭で、体力が回復していき、背中の疲れも取れ、元気になってきた。

詰所で毎日来るケ スワ カ に相談を何度もした。そして、主治医が、援護寮を紹介してくれ、援護寮のKさんが来られた。そして、色々、話したが、内容は、覚えていない。

「K施設長は、僕にどうという印象を持ったんだろう。」ある日、病棟診察

「君は、就労だけが問題やからねえ。」

「そうなのか。確かに、一人暮らしもしたし。ただ、薬をのんでなかっただけだ。」希望が見えた。そして、ある日、

「そろそろ退院しようか。」

「はい。」外来に父親が来た。二人とケ スワ カ と援護寮へ行った。個室へ案内され、

「きれいな所やなあ。」ベッドと布団があり、電話もあつた。

「ホテルみたいだ。」そして、退院し、入寮した。

「集団生活が続くなあ。」別に嫌ではなかったが、寂しがりな僕には、助かる。

仕事に復帰し、最初は、週1件から始めた。あとは、デイ・ケアというリハビリに行った。

援護寮に

「尾崎豊」の好きなAさんがいた。Aさんは、隣同士の部屋だった。毎晩、ホルでAさんと

「十七歳の地図」を聞いていた。

ある日、施設長のKさんから

「精神障害者ホームヘルパの講師をしないか。」と誘われた。なんとお金がもらえるらしい。リハサルをせず、ぶつつけ本番で40分の体験談を4回程こなした。はじめての経験だったが、自分の勉強になった。

また、

「Iさんもヘルパの資格を取りに行ってるから、友達になってあげて。」と言われ、Iさんに話しかけ、すぐに友達になった。

デイ・ケアに行くとお金を払わなければならないので、働いた

方が、小遣いになると欲が出て、仕事をどんどん増やしてもらい、月、八万稼げるところまでいった。診察でDr.が

「生活費の2/3を稼げるようになったから、そろそろ一人暮らしを考えようか。」と言ってくれた。K施設長に

「不動産屋に行つて来なさい。」と言われ街の不動産屋に

「月、四万位の家賃の所で風呂付きはないですか。」と聞いた。ヘルパ をしているので、清潔にしなければ、と思い、風呂付きは、絶対条件だった。そして、車で四件回り、一件決めた。風呂付きで、月、四万五千だった。父親が、援護寮に来て、その話をし、援助してもらいながら一人暮らしをすることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6213d/>

ホムヘルパ になった僕

2010年10月15日17時43分発行